



Column

サッカーW杯と少年サッカーとそして・・・

吉井 邦恒

サッカーW杯は、イタリアの優勝で幕を閉じてまだ1ヶ月も経っていないが、もう旧聞に属する話題となっている。もっとも日本代表は予想外(?)に早々と予選リーグで敗退してしまい、その戦いぶりについてはあまり記憶に残っていない(否、残して置きたくないという意識が強く働いている)。

その記憶を無理矢理たどってみると、体力や個人技での格差は明らかであったが、日本代表には何よりも積極性が欠けていたように感じられた。

積極性はシュート数に端的に現れる。トラップやキックの精度が高く、どんなにパスを華麗に回していても、フェイントで何人敵を抜いたとしても、誰かがシュートを打たなければ、点が入ることはない。せいぜい引き分けが精一杯であり、勝つことは不可能である。

パスを回して敵の守備態勢を崩そうとするのは、最終的にシュートを打つためである。そのシュートを打つ選手の責任は重大である。1本のシュートミスが、そのシュートをお膳立てした何本あるいは十数本のパスを無駄にしてしまう。はずしたらチームメートに申し訳ないという気持ちが、シュートを躊躇させる。まあ誰かが打ってくれるだろう。とりあえずナイスパスを出しておこう。

* * * *

小学生の愚息は、少年サッカーチームに属しており、たまに試合を見に行く。すると、強いチームほど、どこからでもシュートを打つ。もちろん強いチームの選手は小学生ながら、相当なキック力を持っている。シュートコースが空こうが空くまいが、ゴールに向か

って、何の屈託もなくシュートを打つ。グラウンドも狭いため、ハーフライン付近から打ったシュートが入ることもしばしばである。枠を大きくそれることが多いが、それでも相手の選手に当たってゴールしたり、ゴールバーやポストに当たり跳ね返ったボールを得点することもある。

パス主体のチームも結構ある。サイド攻撃から、センタリングしてシュートという基本パターンをよく練習している。パスの受け手として中央付近には、シュートをするのは俺だというのが少なくとも2、3人はいて待ちかまえている。一方、ボールを持っている選手もセンタリングせずに強引にシュート狙うことが多く、これが意外と決まる。子供たちは、はずすことよりも、入ることをイメージして、シュートを打っているようである。

彼らには、もちろんはずしたら仲間に悪いという気持ちもあるかもしれないが、それよりも自分が点を決めて勝ちたいという積極性があふれ出ている。

* * * *

サッカーの話を、強引に研究活動に結びつけてみたい。研究の本質は、もちろん役に立つということもあるが、他人とは違うというオリジナリティをアピールすることだと思う。過去からの研究成果を基礎とし学ぶことは、いわばチームの中での決まり事を理解し、パス回しに参加している段階といえよう。そこから、自らの新奇性を打ち出していくことは、パスを受けて、自らがシュートを打ちに行くことにたとえられるのではないか。成功するも失敗するも自己責任だが、積極性がなければ、オリジナリティを獲得することは難しいであろう。当研究所においては、最近、行政部局との距離感から、正確なパス回しに気を使い過ぎてきているように思われる。オリジナリティのある研究を行うことが禁じられているわけではないが、行政部局の要請とオリジナリティのある研究が両立しないような意識が醸成されつつあるように感じられる。既存の研究成果からパスを受け取り、オリジナリティの追求という研究員本来の姿に立ち返り、ゴールに向かって積極的にシュートを打ち込みたいと考えている。